

タスク10 読む力を伸ばす

日本語教育で主に行われている読解（精読）の授業の流れを今日は体験してみましょう。その中で、様々な議論のある内容を話し合うことによって、「読む力」を伸ばすためにはどのような具体的方略を用いるのがよいか考えてみましょう。

まず、全体の流れを簡単に説明すると以下ようになります。これだけではわかりにくいので、実際の教科書を見ながらどの部分が、その練習になるか考えてみましょう。

1. プリタスク

(※語彙ドリル・文法練習)

2. 読み

(※語彙ドリル・文法練習)

3. 理解確認

4. まとめ・発展（再生・感想・発表）

練習1：プリタスクとは、実際の読解を始める前の準備作業です。読解の素材は、通常学習者自身ではなく、教師が選ぶものが多いため、学習者に興味を持てなかったり、あまり親しみのない内容であったりすることもあるので、プリタスクには目標意識の誘発、興味喚起、スキーマ（背景知識）の有無の確認や提供をするといった目的があります。

☛次の『J501』L2の本文を見て、プリタスクを考えてみましょう。どのようなプリタスクを準備すれば、より学習者の読解活動に役に立つでしょうか？

プリタスクの内容：

練習2:本文の「読み」について考えてみましょう。読み方の指導には、

① 学習者が各自、自分のペースで黙読する(黙読1)

です。それぞれのアイデアで作ってみましょう。

プリタスクの内容：

ワンポイントメモ

シャドーイング

近年、日本語教育の世界でもようやくシャドーイング法が注目されるようになりいくつかの教材（斉藤仁志 2006『シャドーイング日本語で話そう』くろしお出版など）が出版されている。

シャドーイング法とはつまり「聞こえてくるスピーチに対してほぼ同時に、あるいは一定の間をおいてそのスピーチと同じ発話を口頭で再生する行為」（玉井、2005）と定義づけられている。

英語教育における先行研究では、玉井健（2005）がリスニング指導法の一環として、英語学習者を対象にシャドーイング法を導入し、短期間で学生のリスニング力に変化が見られたこと、また興味深いことに、中級の学生よりもむしろ初級の学生に効果が出たことを報告している。さらに迫田・松見（2004）はリーディング指導として、船山（1998）は、語彙の定着化、山根・斉藤・八島（2004）ではプロソディ習得にも効果があることを指摘している。

ピアリーディング

ピア・リーディングでは、一つのテキストを仲間と一緒に読みながら、わからないことばを確認したり、内容について質問しあったりします。語句や内容の理解だけでなく、推理小説ならいっしょに結末を予測したり、評論なら筆者の主張に対して互いに意見を述べたりして、テキスト理解を深め、さらには自分自身の考え方や価値観を再検討していきます。教師が問いを発したり確認したりするのではなく、学習者同士が互いに尋ね答えるという相互質問の活動をとおして、自律的に学ぶことを目指しています。

より深く学びたい人のために

斉藤仁志（2006）『シャドーイング日本語で話そう』くろしお出版

館岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピアリーディングへ日本語学習者の読解過程と対話的協働学習』